

編集者

ESD-J 理事、エコ・コミュニケーションセンター代表  
ESD-J 事務局次長

森 良  
佐々木 雅一

執筆 及び  
アドバイザー

国立教育政策研究所 教育課程研究センター 基礎研究部 総括研究官  
東京都教育庁 地域教育支援部 生涯学習課 主任  
多摩市教育委員会 教育部 教育指導課 参事  
多摩市立東愛宕中学校 校長  
多摩市立連光寺小学校 校長  
板橋区立成増小学校 地域コーディネーター  
気仙沼市立中井小学校 教頭  
NPO 法人 ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし

五島 政一  
清水 敏治  
千葉 正法  
富田 広  
藤井 香代子  
白鳥 円啓  
及川 幸彦  
廣瀬 カズ子

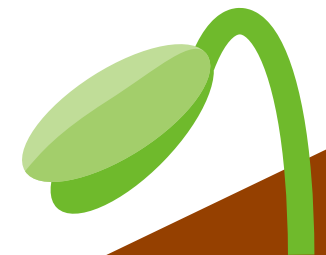
# 学校と地域がつくる 希望への学びあい 2

## 次世代の 市民を育む 「学び」の ために

# ESD

Education for Sustainable Development

持続発展教育



●お問合せ

認定NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J)  
TEL: 03-3797-7227 E-mail: admin@esd-j.org

●制作

株式会社トライ

# 子どもたちの「今」と「未来」に必要なこと

今、自尊感情の低い子どもが増えています。人と関わることや、自分の意見をことばにすることが苦手な子どもも増えています。さまざまな問題に対して、それを自分ごととしてとらえ、自ら考え解決していく力が弱くなっているとも言われています。これらは、未来を担う子どもたちの「生きる力」が弱くなっているといえるのではないのでしょうか。

その一方で、私たちの暮らす社会の未来は、ますます不透明になっています。世界各地で異常気象が続き、紛争は繰り返されています。近い将来、エネルギーや食糧の状況はどうなっているのでしょうか。国内でも少子高齢化や農業の衰退、支え合いを失った地域からは無縁社会という言葉まで生まれ、未来に対して希望を持ちづらい時代です。

ますます激しい変化が予想される現在、子どもた

ちが自分の人生を大切に、多様な人との関係性の中で、自分の役割や存在価値を見出し、社会の課題を自分ごととしてとらえ、多様な人たちと協力して課題解決に取り組む、そんな頼もしい「次世代の市民」を育てることができるかどうか、今、教育に関わる全ての人に問われています。

地域にある環境や社会的な課題をテーマとした、体験的かつ課題解決的な学習は、現代の子どもたちに不足しているといわれている実体験や、人や社会との関係性を補完するものとなるでしょう。そして、子どもたちの他者理解力や問題解決力の向上、あるいは不登校やいじめの改善にもつながると期待されています。しかしながら、こうした学習は学校だけでは進めることができません。学校と地域が一体になって取り組むことで、子どもたちの「未来を

創造する力」を育むことができるのです。国際的には、こうした学習のことを「持続発展教育（ESD: Education for Sustainable Development）」と呼びます。

NPO法人 持続可能な開発のための教育の10年推進会議(ESD-J)は、文部科学省の委託事業である「日本／ユネスコパートナーシップ事業」として、子どもたちの(あるいは大人たちの)市民力を高める教育の実践について、学校と地域に働きかけてきました。

本誌は、平成21、22年度の私たちの取り組みを通じて、子どもたちと大人たちが学んだことを整理したものです。本誌が、学校と地域で地域の子どもを育てようとされている多くのみなさんの教育活動のヒントになれば幸いです。

## 教員の方へ

持続発展教育（ESD）を行うことは、新しい教育活動をはじめればかりではありません。子どもたちの「今」と「未来」を見据え、今までの学校における取り組みを見直し、互いにつなげる、そんな事例を紹介します。

## 教育委員会の方へ

教員研修に持続発展教育（ESD）の視点を盛り込んでください。それは新学習指導要領で重視されている「変化の激しい社会を担う子どもたちに必要な生きる力」の育成につながります。

## 地域コーディネーターの方へ

学校だけで多様なつながりを扱う持続発展教育（ESD）に取り組むには限界があります。学校と地域が共に地域の子どもを育てる。地域を題材とした学びをつくる。そんな方法を紹介します。

## NPO、市民団体の方へ

学校の持続発展教育（ESD）を社会とつながりのある効果的な学習にするためには、NPO・市民団体と学校との連携が重要だといわれています。まずは、学校が目指すESDについてご理解ください。

## 子どもたちは今

- ・ 自尊感情が低い
- ・ 人との関係を築けない
- ・ 他人の視点に立って考えるのが苦手
- ・ 地域や社会のことに関心が低い
- ・ 学ぶ意味が分からない

このような課題を同時に解決する糸口が

地域の資源、課題、  
人を生かした  
「探求型学習」です

## 地域社会は今

- ・ 核家族化、少子高齢化
- ・ 家族のコミュニケーション不足
- ・ 地域における人間関係の希薄化
- ・ 安全性への不安
- ・ 元気のない地域経済、商店街
- ・ 失われていく自然や文化

# ESDで子どもたちの「生きる力」を育成する

## ESDとは

ESDとは、持続発展教育（Education for Sustainable Development）の略称です。2002年のヨハネスブルグサミット（持続可能な開発に関する世界首脳会議）で、日本は、持続可能な社会を実現するために世界中で人づくりに取り組むことを提案し、「国連ESDの10年」（2005年～2014年）がスタートしました。

ESDは、学校教育、学校外教育を問わず、市民団体や企業などあらゆる主体間で連携を図りながら、教育・啓発活動を推進する必要があるといわれ、その領域は、環境、福祉、国際理解、貧困、

経済、文化の継承、など多岐にわたるものです。

新学習指導要領における「変化の激しい時代に求められる生きる力の育成」とESDとは密接にリンクし、総合的な学習の時間をはじめ、社会、理科、技術家庭科などにおいても、ESDの視点が導入されています。

ESDに関する詳細は下記ESD-Jのウェブサイトをご参照ください。

[www.esd-j.org/](http://www.esd-j.org/)

## ユネスコスクールとは

ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理想を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校です。世界180カ国で約8500校がASPnet（UNESCO Associated Schools Project Network）に加盟し、国内では2011年1月現在、279校の幼稚園、小学校・中学校・高等学校及び大学等がこのネットワークに参加しています。

日本では、ASPnetへの加盟が承認された学校を、ユネスコスクールと呼び、学校における「持

続発展教育（ESD）」の拠点として位置づけられています。ESDの普及促進には、ユネスコスクールのネットワークを活用することが非常に有効な手段であると考えられます。

ユネスコスクールに関する詳細は13～14ページおよび下記ユネスコスクールの公式ウェブサイトをご参照ください。

[www.unesco-school.jp/](http://www.unesco-school.jp/)

## 学校がESDに取り組む2つのアプローチ

ESD-Jは文部科学省の委託を受け、持続発展教育（ESD）への取り組み支援を目的に、教育委員会と連携した事業を行ってきました。その中で

学校がESDに取り組む際に効果的だと思われる2つのアプローチが見えてきました。

**学校と地域で進めるESDのアプローチ1 「既存の学習」を「ESDの視点」で見直す**

**学校と地域で進めるESDのアプローチ2 「地域の資源、人、課題」を題材に学びを創造する**

次ページよりこの2つのアプローチについて具体的事例を交えながら紹介していきます。

## ESD-Jが実施した 日本／ユネスコパートナーシップ事業

学校と地域で進める  
ESDのアプローチ

1

既存の取り組みをESDの視点で組み立て直す  
**多摩市教育委員会 ESD 教員研修会の開催**

ESD-Jと多摩市教育委員会では、「2050年の大人づくり」を具体化するために、2009年度から小中学校の教員を対象とし、地域のNPOなども一緒に「ESD研修会」に取り組ん

できました。2009年度は、①ESDの視点や方法を身につける、②小・中学校それぞれで一つ既存の授業を取り上げてESDの視点で組み立て直す、ということに取り組みました。

2009年度の研修の参加者から「実践を通じた検討が必要」との声が上がり、2010年度は、研修の参加者が実際にESDを視野に入れた授業をやってみて、みんなで評価・手直ししていくやり方をとっています。

すでに多摩市では10校がユネスコスクールに登録され、さらに6校が申請中ということです。3年目となる来年度は、他の小中学校にも広がっていこうとしています。



多摩市ESD実践研修の様子

学校と地域で進める  
ESDのアプローチ

2

子どもが自発的に探究し、地域の力で深める  
**ユネスコスクールセミナーの開催**

東京都にはすでに560人の地域コーディネーターが、学校と地域をつなぐ役割を担っています。2010年度は、地域教育推進ネットワーク東京都協議会と連携し、文京区、板橋区、小平市の3地域のコーディネーターとともに、地域にある人と資源をいかしたESDの取り組みを話しあうために、ユネスコスクールセミナーを開催しました。

セミナーには、近隣地域の地域コーディネーターや教育委員会の学校支援本部担当者、その地域の保護者などが集まり、学校と地域がどのように協力すれば地域の子どもの共に育てていくことができるかを話し合っています。

今、東京では、地域コーディネーターが核となり、PTAの保護者たちや自治会の人たちもまじえて、地域発の取り組みが始まろうとしています。



板橋区で開催したユネスコスクールセミナーの様子



# 既存の学習を ESDの視点で見直す

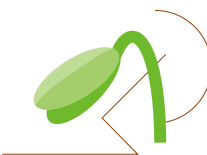
ESDとは、温暖化や里山の荒廃といった環境問題や無縁社会や高齢化などの社会的問題を抱えた現代社会へ、子どもたちにどのような価値観や力をつけて送り出すかという、教育の大きな目的に近いものです。それは他者と協力する態度や、人・社会・自然とのつながりに関心を持ち、尊重する態度です。また、課題解決力や多面的なものごとを考える力、コミュニケーション力などです。

そのような目的の学習は学校にはたくさんあると思います。環境教育や食育、農業体験、職業体験などの社会のことを学ぶ体験学習や、教科における課題解決的な学習や他者との関係性をつくる学習などすべてがESDにつながります。

ESDに取り組むということは、これまでの取り組みを大切にしつつ、ESDの目的に照らし合わせて見直すということです。例えば、職場体験などの既存の取り組みに環境や社会貢献といったテーマ性を加え、重層的に社会を学べる展開はどうでしょうか。また自然体験や福祉体験などの体験学習を単に「楽しかった」「驚いた」で終らせるのではなく、そこから見えてくる課題を探求し、自分たちができる解決方法を見出し、協力して取り組み、振り返るといった、ストーリー性のある実践は、子どもたちの実践力を高めるでしょう。

未来を創造する価値観や力は短期間では育めません。小学校6年間、または小中学校9年間といった長期的視野で、発達段階に合わせた子どもの感性と、社会での実践力をつけていくような学習プランを立て、それらを教員が共有することが大事です。どうぞ、ESDという考え方に照らし、今ある授業をどうつなげられるか、どんな展開が可能なのか、学校全体で見直すことから始めてみてください。

## 大切にしたい ESDの視点 その1



### ESDで重視される“3つのつながり”

- ☐ 人と人のつながり：命や人間の尊厳の大切さ、多様性の尊重
- ☐ 人と自然のつながり：地域の自然とくらし・産業・文化、資源の有限性や循環
- ☐ 人と社会のつながり：貧困や人権・平和の問題、私たちのくらしと世界とのつながり

### 既存の授業を見直す“3つのつながり”

- ☐ 教材のつながり：教材（現象や課題など）を他の教科や他学年の学習につなげる
- ☐ 人のつながり：子どもたちに他者（児童同士、地域の大人、国内外）とのつながりを感じさせる
- ☐ 能力・態度のつながり：関心、知識、能力や態度を継続的に実生活・実社会のなかで生かす

### ESDで大切にしたい“3つの方法”

- ☐ 五感を使い、本物を体験する
- ☐ 子どもの主体性を尊重し、それぞれの発見、気づきを重視する
- ☐ 子どもたちが関心を持ち、体験し、探求し、ふりかえる、といったストーリー性をもたせる

#### 多摩市ESD研修 —各校の特色を生かしESDを探った—

多摩市立東愛宕中学校 校長 富田広

多摩市ではESDをテーマに2009年度より教員研修を行ってきました。特徴は3つ。NPOと教育委員会が連携して企画実施したこと。地域の市民団体などと共に行なったこと。そして、これまでの各校の取り組みをベースにESDに実践的に取り組みながら、互いに学びあっていることです。この研修を通じ

て本校では職場体験をESDの視点で見直すことに挑戦しました。その結果、生徒の社会への意識をこれまで以上に広げることができたようです。多摩市のESDの取り組みはまだ、始まったばかりですが、各校のこれまでの特色を活かしながら、多摩市ならではのESDを探っていきたいと思います。

## 事例紹介 1

# 「職場体験」を「ESDの視点」で見直してみる

多摩市立愛宕東中学校

これまでは、興味のある職業を体験し、そのために必要なことを学ぶ機会として職場体験を実施していましたが、同校では、ESDのキーワードである「つながり」をふまえ、次の視点を加えてみました。

- 人と人のつながり 従業員と顧客との関係はどのようなものなのか？
- 人と自然のつながり 会社は自然環境の保全にどう貢献しているのか？
- 人と社会のつながり 会社は社会貢献や国際貢献をどのように実践しているのか？

生徒たちは企業を訪問し、それまでに他の教科や事前学習で学んだ環境問題や、地域社会が抱える課題についての知識を駆使しながら（教材のつながり）、企業の取り組みについてインタビュー（人のつながり）を行いました。この学習を通じて、生徒たちは、環境や社会の問題をより身近な地域社会のこととして捉え、「働くうえで大切にすべきこと」を多面的かつ包括的に学べた（能力・態度のつながり）そうです。



### ESDの視点で見直したポイント

生徒が社会とのつながりを創出するために

「会社が良ければ、他はどうでも良いのか？」  
「社会や地球が続くために必要なものとは？」  
「企業の社会的責任とは？」などの形で問題提起をし、生徒たちが「つながり」を意識できるように指導しました。

## 生徒の声（意識調査より一部抜粋・順不同）

Q. 働くうえで大切にすべきこととは？

	実施前	実施後
「職場の人々と積極的に関わること」	54%	68%
「環境問題に取り組むこと」	43%	48%
「お金を稼ぐこと」	32%	39%
「(利益をあげ)会社を発展させること」	44%	25%

## まとめ

職場体験は多くの学校ですでに実施されており、中学校におけるESDの実践として、取り組みやすい手法と言えます。今年度初めての試みで、改善の余地もあるようでしたが、意識調査の結果から、生徒たちの視点が、「より外へ」向けられ、「つながり」を意識するようになったことがわかります。仕事のというのは、単に利益をあげればよいというのではなく、人や環境、社会の役に立つことも重要な目的であることを学んだのではないのでしょうか。

## 事例紹介 2

# 「体験学習」を「ESDの視点」で見直してみる

多摩市立連光寺小学校

同校では、これまでも地域に根ざした体験的な学習に取り組んできました。今年度、それらの活動を「ESDの視点」で見直すことで、活動にさまざまなつながりが生まれると共に、教員の側にもさまざまな意識の変化が見られました。



## 連光寺小学校の各学年のESD

- 1,2年生 自然と関わる 「野菜を栽培する」「地域の農家と関わる」
- 3年生 人と関わる 「商店街で仕事を体験する」「地域のお年寄りから連光寺の昔の話を聞く」
- 4年生 自然を学ぶ 「多摩川での自然観察活動を通して、広い意味での生態系を考える」
- 5年生 自然と人の共生を考える 「専門家に研究方法を学び、関心のあるテーマを追求する」「近隣で稲作体験をする」
- 6年生 社会の一員として人と関わる 「地域の歴史や文化を調べ、達人に学ぶ」「世界の文化を知る」「福祉活動を体験する」

### ESDの視点で見直したポイント

- 育みたい子どもの力を整理し(関わる力、課題を持つ力、課題を追求する力、表現する力、自分を見つめる力)、それぞれの力ごとにこれまでの活動を洗い直しました。その結果、活動に対する教員の目的意識が明確になりました。
- 総合と教科のつながり、学年間の活動のつながり、地域とのつながりなど、各教員が「つながり」を積極的に探すようになりました。結果的に、それぞれの学習はより包括的なものとなり、また学年単位の意識から、より長期的な子どもの成長へと意識が向けられました。それらのつながりを体系的に整理し、ESDカレンダーを作成しました。
- これまでと同様のテーマを扱っても、「課題設定」「情報収集」「整理分析」「まとめ表現」といったストーリー性を重視し、体験だけで終わらない、課題解決型の学習へさらに一歩近づきました。



## まとめ

ESDの視点で見直すということは、学習そのものを原点から捉え直すことであり、教員自らが、これまで取り組んできた学習の価値を再認識するプロセスでもありました。それらを教員同士が話し合い、学校全体で共有することは、子どもの価値観形成や行動態度の変容といった長期的な教育には非常に重要なことです。さらに、同校の場合、その捉え直しの結果、これまでの活動の改善の方向性が見え、教科・地域とのつながり探しへと発展しました。



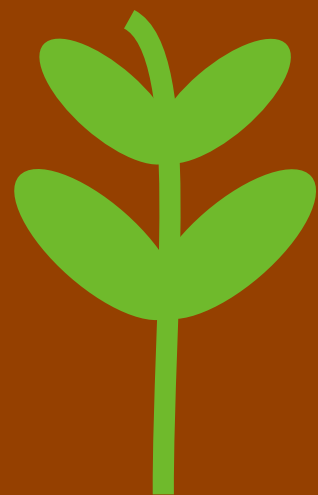
# ESDの アプローチ 2

## 地域の資源、人、課題 を題材に 学びを創造する

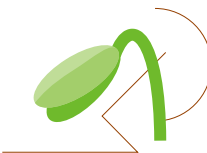
学校が社会システムの一つである限り、そこで学ぶ子どもたちは、「社会に出る」のではなく既に社会の一員であるとも言えます。教科や体験学習を通じて「社会」を学ぶことは出来ませんが、最も身近な地域社会についてはどうでしょう。子どもたちを含め、保護者や教員も、地域社会とのかかわりの希薄さが問題となっている今日、地域の担い手を育てるという意識で、学習を捉え直してみることが重要です。

社会、理科、家庭科など、学校ではすでに様々な地域学習が行われています。そこに、「この地域に残したいものはなにか」「この地域が抱える課題とはなにか」「そのためにどうするか」という、より地域に踏み込んだ学習をすることで、子どもたちは、「自分たちにも役割がある」「私も人や社会の役に立てる」ということに気づききっかけを得ることが出来ます。こうした意識の変革は、保護者や教員、地域住民といった大人たちにも求められているといえるのではないのでしょうか。

このような活動は、学校が中心になりつつも、学校だけで成り立つものではありません。実際にESDを実施している学校では、農林漁業者、商工業者、NPO、行政職員、施設の職員など、たくさんの地域の人々にご協力をいただいています。また、学校と地域の人々を結び、調整するコーディネーターも各地で生まれつつあります。学校現場がもつ教育的スキルと、地域の人々のそれぞれの専門性によって、授業や活動を進めていくのが理想的なESDへのアプローチだといえるでしょう。



## 大切にしたい ESDの視点その2



### ESDで活用したい5つの“環境”

- ☐ 地域の自然や文化施設、社会教育施設などのフィールド
- ☐ 大学やNPO、企業、農家、商店主、保護者などの地域の大人たちや専門家
- ☐ 地域のNPO や自治会などが行う活動や行事
- ☐ 他校種(幼、小、中、高、大)や異なる地域の学校
- ☐ 学校支援本部や学習コーディネーター

### 地域を見直す3つの切り口

- ☐ はじめの1歩は、子どもたちと一緒に、学校や地域の人々が、この地域で残したいものに目を向けることから
- ☐ 地域の問題や身近な課題を掘り下げ、その解決策やよりよい未来の姿を描く
- ☐ 多様な立場、世代の人たちと一緒に学びあう

#### コーディネーターが企画し、各地で行ったユネスコセミナー

板橋区学校支援本部 コーディネーター 白鳥円啓

東京都の生涯学習課がすすめている「地域教育推進ネットワーク東京協議会」がESD-Jと協力し、文京区、板橋区、小平市の3地域で、ユネスコスクールセミナー「学校と地域で育てる地域の子ども」を展開してきました。12月に板橋の成増小学校で実施したセミナーには、地域の方、保

護者や市民団体の方々60名が集まり、地域の子どものために活かせる地域の資源探しを、参加者全員で取り組み、学びありました。今回のセミナーもひとつのきっかけとして、今後はESDの視点で、学校と地域が協力しながら、板橋の学習教材づくりを進めていきたいと思っています。

## 事例紹介 3

# 地域の資源を体系的にカリキュラム化する

宮城県・気仙沼市

## 地域にある力を生かすメリット

### ●知識ベースのために

同市の小学校では、地域にある専門機関（大学・図書館など）、行政（環境課・教育委員会など）、企業やメディア（商工会議所・新聞社など）、各種NPOやNGO、他の小学校等と連携し、学習内容の開発や実践に必要な知識や技術を導入しています。地域にある多様な力を効果的に生かすことで、より深い学習の展開が可能になります。

### ●持続的な取り組みにするために

また、地域のさまざまな人たちが学校の取り組みに関わることで、仮に中心的な管理職や教員が異動してもその取り組みを継続することが可能となります。



### 参考例 気仙沼市立面瀬小学校の取り組み／5年生の場合

		教科との関連	主な学習活動	主な連携機関
4月 ↓ 9月	●第1サイクル 「面瀬地球環境調査隊 Let's go!」	学校行事 野外活動	面瀬川河口の生物を調べ、特徴を知る。 祝い崎の生き物を観察し、何を食べているか等の関心を持つ。 いちのせき健康の森で自然体験活動をする。	気仙沼自然塾 東北学院大学地域構想学科
10月 ↓ 12月	●第2サイクル 「海の恵みと人々の生活」	国語 社会 家庭	水産物と食生活について調べ、「海の市」で買い物体験をする。 カキ養殖見学とカキむき体験及びカキやサンマを食べ、海の恵みを味わう。 親子マグロ料理教室	階上漁業共同組合、地球漁民 北かつ商事 (旧北部鯉鮒漁業共同組合)
1月 ↓ 3月	●第3サイクル 「リアス海のミュージアムをつくろう」	社会	海辺の文化について専門家の話を聞く。 『海のミュージアム』を作ろう。 学習に協力していただいた方々に学習の感想とお礼の手紙を書く。	リアスアーク美術館

この様な総合と教科をつないだ地域の学習を1年生から6年生まで体系的に行う。

## 体系的な「探求型学習プログラム」を開発

各学年のテーマに沿って、それぞれの教科をESDの枠に組み込むことにより、学習の範囲に広がりが出て、知識の深さが増します。また、全学年を通した体系的なプログラムづくりをすることで、長期にわたって子どもたちの価値観を正しく形成し、多様な能力を育み、将来的に役立つ「生きる力」につなげていくことができます。

### まとめ

地域を題材にした学習を、地域ぐるみで支える。そのような地域に根ざした学習は、子どもたちと、人、自然、社会とのつながりをつなぎ直します。さらに、それらの活動を体系的にカリキュラム化することで、特別な技能や経験を持った教員がいなくとも、その活動自体を継続させることが出来ます。また、地域側にとっても、大人たちが、子どもたちとの学習を通じて自分の地域の価値に気づき、地域づくりに取り組んでいくことになるでしょう。

## 事例紹介 4

# 防災教育、守られる側から守る側へ

東京都・板橋区



## ESD的な防災教育の目的

防災教育における本来の目的は、生徒一人ひとりが自然災害を正しく理解し、自らの確な判断を下し、防災あるいは減災行動をとれるようになることです。しかしながら、多くの生徒たちが「自分たちは地域に守られる側」と受け身的な考えを持つ傾向にあります。そこで、ESD的な防災教育を実施することで、本来の目的を達成すると同時に、「自分たちは地域を守る側」という、さらに発展的かつ自発的な考え・行動に導くことを最終目的とします。

### ●守るべき対象を広げる

ESD的な防災教育においても、第一に守るべきは、自分自身です。そのうえで、地域のお年寄りや障がいのある人など、地域に住む弱者を含めて、「守るべき対象」と考えられるようになることを目指します。

### ●学校を避難場所として考える

災害時、多くの学校が避難場所に指定されますが、実際に避難場所として機能するかどうかは、あまり深く考えられていません。ESD的な防災教育では、現実的な課題解決学習として、学校側の備えについても考えます。

### ●地域愛と自尊感情を育てる

災害時には、地域にいる多様な人たちとの連携が、大変重要となります。訓練を通して、生徒一人ひとりが、地域住民の一員としての自覚を持ち、地域を守るうえでの担い手になれることを実感できるようにします。

### 参考例 板橋区立高島第三中学校の取り組み

同校では、地域のNPO（ボランティア・市民活動学習推進センターいたばし）がコーディネーター役を務め、災害時に1人で避難することが困難な「災害時要援護者」を中心とした避難訓練を実施しました。車椅子の操作方法や、視覚障がい者をガイドヘルプする方法などを事前に学んだ生徒たちが、要援護者の避難搬送支援に取り組みしました。

参加者：生徒(59名)、教員・PTA・消防署等(30名)、地域住民(171名 障がい者は内5名)、民生・児童委員(10名)、NPO関係者(25名)

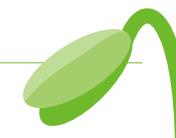
### ESD的な防災教育が生徒にもたらしたもの

(生徒の感想文より)

- ・地域のお年寄りや障がい者を守ることを自覚し、責任感を持つようになった。
- ・自分たちの力が地域の役に立つことを実感するようになった。
- ・要援護者を搬送する難しさを痛感すると同時に、配慮すべきポイントを学んだ。
- ・感謝される喜びを知った。

### まとめ

「守られる側から守る側へ」。このキャッチフレーズと共に、板橋ではすでに複数の学校でESD的視点の防災教育が行われています。それはまさに、脆弱化する地域コミュニティを学校が核となって再生するプロセスに他なりません。そして生徒たちにとっても、災害への心構えができるだけではなく、地域での役割を実感し、自分たちは地域で必要とされているという、自尊感情を高める貴重な体験学習となっています。



# ESDに取り組む学びのネットワークへ参加しよう

今後、各校で「持続発展教育（ESD）」を普及促進していく上で、文部科学省日本ユネスコ国内委員会により加盟が呼びかけられている「ユネスコスクール」のネットワークを活用することがひとつの有効な手段であると考えられます。

## ユネスコスクールの活動目的

- ・ユネスコスクール・ネットワークの活用による世界中の学校との交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと。
- ・地球規模の諸問題に若者が対処できるような、新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すこと。

## 参加している学校

公立私立を問わず、ユネスコの理念に沿った取り組みを継続的に実施している、就学前教育・小学校・中学校・高等学校・技術学校・職業学校、教員養成学校など。

## 参加校に求められること

- ・法的拘束や義務はありませんが、積極的な活動が求められます。
- ・年に一度、日本ユネスコ国内委員会に報告書の提出が必要です。
- ・ユネスコが提案する教材が送られ、教育現場での実験・評価を依頼されることがあります。
- ・ユネスコから年に数回、世界のユネスコスクールの活動報告が記載されている情報誌が送付されるとともに、ユネスコが行う様々な活動に参加する機会があります。

## ユネスコスクールへの加盟のメリット



- ・ユネスコ本部より認定証が送られます。
- ・情報誌が送付され、世界のユネスコスクールの活動報告など、各国の特色ある取り組みを知ることができます。
- ・全世界で約8500校あるユネスコスクールと、交流をする機会が得られます。
- ・その他、活動資金の提供や、教材・情報の提供、ワークショップ・研修会への参加、国内の関係機関との連携、強化などが挙げられます。

## 問い合わせ先

**ユネスコスクール事務局**（日本ユネスコ国内委員会事務局・文部科学省国際統括官付）

〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2

TEL: 03-5253-4111（内線3402） FAX: 03-6734-3679

Email: jpnatcom@mext.go.jp ウェブサイト：http://www.mext.go.jp/unesco/

東京都  
江東区立東雲小学校

## ユネスコスクールに参加しましょう！

ユネスコスクールに参加したことで子どもたちにとっては、「より良い未来を創るために、学び、考え、行動しよう」という夢や目標が生まれ、学びの中に自信や誇りが育ったことが最大のメリットです。

また学校にとっては、人権・環境・国際理解といった、従来から重視してきた内容を「持続可能なより良い未来づくり」という視点からとらえ直し、横断的・総合的に関連づけることで、教育を一段と充実させることが可能になりました。

本校では、ESDカレンダー\*という指導計画を立てることで、学習指導要領で示されている「生きる力」を育む教育の進め方が、より明確になってきました。

富山県  
富山市立中央小学校

## ユネスコスクールに加盟してここが変わった！

- ・ユネスコスクール加盟校を対象にした教材の提供や助成金の活用により、子どもたちの学習や活動が充実しました。
- ・インターネットを活用して他校と交流し、子どもたちが自分たちの取り組みに自信をもつことができるようになりました。
- ・ユネスコ協会からの講師の招聘やユネスコスクール研修会への参加により、教職員や子どもたちのESDへの理解が深まりました。
- ・ユネスコスクールに加盟し、ESDを推進していくことで、自分たちの学校や地域に誇りをもつようになり、保護者や地域の関心も高まりました。そして、子どもたちの活動に対して、温かい励ましや協力をしていただけるようになりました。

奈良県  
奈良教育大学附属中学校

## ユネスコスクールに加盟して良かったこと

自分たちが進める教育実践をESDの枠組で捉えなおすことによって、それらが持続ある未来社会を担う人を育てるという目標に則ったものになっているかどうかを確認し合うようになりました。日本や世界のユネスコスクールの実践に接することができるのも加盟の大きなメリットです。世界中のなかまが同じ願いを持って実践していることに連帯意識を感じながら、私たちも日々取り組んでいます。さらに海外のユネスコスクールとの交流の機会も得られ、これからの国際理解学習にも意欲を燃やしています。また、国内外の教員や研究機関の方々との人的交流の機会があるのも魅力です。